

○プロローグ  
○タイトルコール

若干不機嫌そうな尚文がクテンロウの城の廊下を歩きながら独り言を言う。

尚文 「ったく……ラフタリアは……俺が居眠りをしていたら起こせば

良いと言うのに……ご丁寧に羽織りまで掛けて……」

尚文N 『俺の名前は岩谷尚文。』

図書館で四聖武器書……と言う本を気まぐれに読んだことからゲームの様な異世界に物語の登場人物、盾の勇者として召喚されてしまった大学二年生だ。現在、俺はクテンロウと言うラフタリア所縁の国の城にいる』

フィーロが元気よくやってくる。

フィーロ 「あ、ごしゅじんさまだー」

ラフちゃん 「ラフー」

尚文 「お？ フィーロにラフちゃん。ラフタリアを知らないか？

居眠りをして置いて行かれてな」

ラフちゃん 「ラフ、ラフラフ」

フィーロ 「え？ うん、うん。えっとねーごしゅじんさまが疲れてるからってラフタリアお姉ちゃんが氣を使っただって」

尚文 「わかってる。で、ラフタリアは何処へ行ったんだ？」

フィーロ 「こっちー」

尚文 「そうか、案内してくれ」

フィーロ 「うん」

ラフちゃん 「ラフー」

尚文達が廊下を歩いて行き、ラフタリアが来る。

尚文 「ラフタリアー」

ラフタリア 「あ、ナオフミ様、もう起きてしまったんですか？」

尚文 「起こしても良かったんだぞ。これから用事があるんだから」

ラフタリア 「すいません。疲れていらっしやるだろうと思ったので……」

尚文 「氣にしないで良い。じゃあこれから行けるか？」

ラフタリア 「はい、行きましょう」

尚文N 『ドラマCD・盾の勇者の成り上がり』

○第一話

尚文 「第一話・宝探し」

○クテンロウの都、城の部屋。

疲れた様子で椅子に座るラフタリア。

ラフタリア 「ふう……」

疲れて座るラフタリアを尚文が労う。

尚文 「公務お疲れさん。国内の情勢はまだ落ち着かないな」

ラフタリア 「はい、ナオフミ様。まだ情報が行き届いていない様で、情勢が落ちつくのにまだ数日は掛るようです」

尚文N 『俺達は今、制圧したクテンロウの首都の城内にいる。俺の領地の村をクテンロウの刺客が襲撃してきて、返り討ちにしていたら結果的にこの国を制圧する羽目になった。その経緯で色々あったが……割愛する』

ラフちゃん 「ラフー」

尚文 「俺達も治安維持の為、外回りに出た方が良いか？」

ラフタリア 「いえ、クテンロウとシルトヴェルトの友好条約調印式まで、

私とナオフミ様は城で待機していて欲しいとの話です」

尚文 「そうか。そう言えば、似た様な事をシルトヴェルトの連中に言われたな」

ラフタリア 「調印式が終わるまで我慢しましょう」

尚文 「そうだな。とは言え、少し時間があるな……そう言えば、城の連中に聞いたんだが、ラフタリアの父親の部屋が保存されているらしい。気分転換に見に行かないか？」

ラフちゃん 「ラフー」

尚文 「ラフちゃんもいききたいって言ってるぞ」

フィーロ 「ごしゅじんさまー」

尚文 「お？ どうしたフィーロ」

フィーロ 「フィーロも一緒に行きたい！」

ラフタリア 「わかりました。ここで何もしないよりは良いですね。

じやなきや腕立てや素振りをしてる所です」

尚文 「ラフタリアらしいな」

ラフタリア 「そう言ってもらえると嬉しいです。では行きましょうか」

尚文 「ああ」

フィーロ 「わーい」

ラフちゃん 「ラフー！」

部屋を出る尚文達。ラフタリアの父親の部屋へ移動する。

○ラフタリアの父親の部屋。和室、床は畳。扉はふすま。  
ふすまを開けて中に入る尚文達。

尚文 「ここがラフタリアの父親の部屋か」

ラフタリア 「そのようです……なんとなくお父さんの気配と言うか匂いが残っているような気がします」

尚文 「いろんな思い出が残っているんだろーな」

尚文が室内を見回す。

尚文N 『部屋を見回すと、柱などに背丈を測ってつけた傷跡が数か所あった。俺の家にも、柱に同じような傷があったな』

尚文 「じゃあ色々と見て回るか」

ラフタリア 「はい」

フィーロ 「宝探しー？ 楽しそうー」

ラフちゃん 「ラフー」

尚文が押入れを指差す。

尚文 「いいか、最初の狙い目は押入れだ。何処かに隠し戸棚とかあるかもしれないぞ」

ラフタリア 「宝探しじゃなくて家探しになってます！ 別に良いですけど……」  
フィーロ 「じゃあフィーロが探すー！」  
ラフちゃん 「ラフー」

フィーロとラフちゃんが押入れをさがさと調べ始める。

尚文 「押入れはフィーロ達に任せて、俺達は机を探ってみるか」  
ラフタリア 「そうですね」

尚文が机の上の小さな本棚チェック。

尚文 「ふう。書物が多いな。亜人の国の文字はまだ簡単なのしか読めないんだよなー。……ん？ これは巻物か？」

巻物らしきものを開き、驚く尚文。

尚文 「掛け軸か。立派な文字だな」  
ラフタリア 「お父さんが書いた物らしいですよ」

尚文 「達筆だな。肉球みたいなマークがあるが……」

閃くように尚文は手を叩く。

尚文 「これは、もしや——」  
ラフタリア 「お父さんがラフちゃんみたいな姿になって尻尾で書いたとか想像しないでください」  
尚文 「察するのが上手くなったな。サディナの例がある。アイツは亜人の姿を隠し続けていたぞ」

ラフタリア 「私の種族が獣人化出来るなんてクテンロウでも聞かないじゃな

いですか」

尚文 「……そうだな」

ラフタリア 「なんで不服そうなのか気になりますが……」

（掛け軸を見て）これは確かにお父さんが書いた字です」

尚文 「俺でも辛うじて読める文字だな……確か、これは……」

ラフタリア 「一期一会と書いてありますね」

尚文 「一期一会か……」

ラフタリア 「お父さんらしいです」

尚文 「そうか」

机の上の本棚を更に漁る尚文。掛け軸と同じく巻き物が並べられている。

尚文 「あとの巻物は……絵か。何だかんだで多才な親だったんだな」

ラフタリア 「そうですね。幼い頃からお父さんは何でも出来る人だと思ってました」

尚文 「幼い頃……親……う……」

過去を思い出し、若干落ち込む尚文。

ラフタリア 「ナオフミ様のご両親はどんな方なんですか？」

尚文 N 『言えない。俺を育てるのに失敗したとか本人の目の前で平気で

呟く、無神経な親だなんて』

尚文 N 『家族旅行だって、俺だけ置き去りにされたな……（自嘲気味に）

朝起きたら置き手紙だけでいねーでやんの。まあ、ネットゲームに夢中だったから置いてかれても全然平気だったけど』

ラフタリア 「ナオフミ様？」

尚文 「ん？ コホン、親についてだったな」

気を取り直して苦々しく説明する尚文。

尚文 「凡庸を絵に描いた様な連中だった。子供に自分達の夢を押し付ける所が不満か。強いて言うなら賃貸ではなく一軒家を建てて住まわせてくれて、大学の学費を出してくれた所が長所だ」

ラフタリア「あの、なんでそんな嫌そうなんですか？」

尚文「別に……全然羨ましくなんかないぞ、ほんとだぞ」

ラフタリア、悔しそうな表情で精神世界に没頭する尚文の肩を掴んで揺する。

ラフタリア「ナオフミ様、落ちついてください！」

尚文「……ああ、悪かった。（息を整えて）ところでこれは、水彩画か？  
結構上手いな」

ラフタリア「ですね。私も戦闘だけじゃなくてもっと勉強もしなきゃいけない  
なと、痛感しました」

尚文「それならリーシア辺りに教えてもらうと良さそうだな。  
アイツは博識だし」

ラフタリア「ナオフミ様は教えて下さらないのですか？」

尚文「現代日本の知識提供は出来るが……それでも、専門家に勝てる気は  
しないな」

ラフタリア「聞くだけでも楽しそうですね。今度勉強会をしましょう」

尚文「そうだな」

フィーロ「ごしゅじんさまー」

フィーロが押入れで何かを発見して尚文に声を掛ける。

尚文「ん？ どうした？ 春画とかエロ漫画とか見つけたか？」

ラフタリア「ナオフミ様、お父さんを辱めないでください」

尚文「ラフタリアの父親であろうとも男、それくらいはあつて当然だ。

むしろ無い方がおかしいぞ」

ラフタリア「そう言った恥ずかしそうなものは持ってないと思います」

ラフちゃん「ラフー（ラフタリアに同意して頷く）」

尚文「そうか？ この世界的に王族の方がそういう物を持ってそうだが」

フィーロ「しゅんがつてなにー？」

尚文「お前は知らなくていい……それでフィーロ、何が見つかったんだ？」  
フィーロ「押入れの中にねーこんなのがあったよー」

フィーロが古びた地図を片手で持って振る。

地図を受け取り広げる尚文。

SE…地図（紙）を広げる音

尚文 「これは……地図、というより城内の見取り図か？」

ラフタリア 「そのようですね。ここにバツ印があるのは何でしょう？」

尚文 「俺でも読める文字だな。右から三番目の天井の板？ 何か面白そうだな」

ラフタリア 「宝の地図でしょうか？ 天命の血筋が隠した物とか……」

尚文 「どっちかと言うとタイムカプセルとかじゃないか？」

ラフタリア 「タイムカプセル？ なんですかそれ？」

尚文 「知らないのか？ んー……俺の世界じゃ何かの記念にその時の自分が未来の自分に送る手紙とかを埋める物なんだが……

…過去の勇者がやってそうだな」

ラフタリア 「あ、それは聞いた事があります。それって以前ナオフミ様が読み解かれた碑文のようなものですか？」

尚文 「種類的に間違いでは無いな。これは、そのタイムカプセルに地図を見た者へのメッセージとして謎解き要素をプラスした物だ」

フィーロ 「探すの？」

尚文 「そうだな。危険は無さそうだし、気分転換に良いだろう」

ラフタリア 「城内を守るために危険な警備装置の類があると聞きますが……」

尚文 「何かあったら俺がスキルを使って守るから平気だ」

ラフタリア 「まあ……そうですね」

尚文 「じゃあ行ってみるか。えーっとこの部屋は」

ラフタリア 「代々の天命を担った者が書き留めた書物を収めた部屋ですね。私が案内された部屋の隣です」

尚文 「ああ、あの何か堅苦しい部屋な。じゃあ出発だ」

ラフタリア 「はい」

○クテンロウ、天命の資料室。

廊下を歩く尚文達。フィーロははしゃいでいる。

フィーロ 「次のお部屋はどこかなーここかなー（ここかなー繰り返し）ねーねーまだつかないのー？」

ラフタリア 「そろそろですよ、ほらあの部屋です」

資料室の扉（ふすま）を開ける尚文。  
一行は中に入る。

尚文 「ここか……資料室みたいな部屋だな。埃が積っている様子も無いし

何かを隠しているって雰囲気じゃないぞ」

ラフタリア 「そんな雰囲気は無くてもいいと思いますが……」

尚文 N 『確かに、後世に残す資料に埃を積らせるのは良くは無いらう』

尚文が資料室の棚にある書物を軽く開いて目を通し戻す。

尚文 「ザッと見た感じだと、不自然に大きく抜けた箇所があるな」

ラフタリア 「何でも過去にマキナが『クテンロウは過去では無く未来を見据えるのよ！』って宣言して資料の破棄を行わせたそうです」

尚文 「バカな政治家が言いそうなセリフだな。過去があって今があるんじゃないのか？」

ラフタリア 「その通りです。そう思った方々が秘密裏に偽物とすり替え、保管していたそうです」

尚文 「じゃあ今ここにある資料は城を占拠した際に戻された物って事か」  
ラフタリア 「はい。写本や復元の為に戻っていないものがあるので、まだ全部がここにあるわけではないそうですが」

尚文 「色々と秘密が隠されていそうだな」

ラフタリア 「ですね。天命以外は読めない、門外不出の書物とかもあったそうですよ」

尚文 「そんな重要な物を捨てようって発想が凄いな。一体あの女は何が目的だったのやら……」

ラフタリア 「随分と身勝手な事をしていたようですし、天命の一族の崩壊に一枚噛んでいたって話ですからね」

尚文 「とんだ悪女だな。あの女と重なってイライラする。そんな不愉快な話は置いて、こここの資料をラフタリアはちゃんと見ておくんだぞ」



ラフタリア 「はい。もしかしたら更に強くなるヒントが隠されているかもしれない  
ませんね」

尚文 「だな、ラフタリアの先祖もかなり強かった。その謎が分かるかもしれない」

ラフタリア 「ええ」

尚文 「よし、それじゃあ宝探しを再開するか！」

フィーロ 「わーい！」

ラフちゃん 「ラフウー！」

ラフタリア以外が楽しげな声を出す。

地図のしるしの場所を探しながら部屋を歩く。

ラフタリア 「ナオフミ様、何か楽しそうですね」

尚文 「まあな。よし、さっきの地図によれば天井板を調べるんだったよな。……この辺りだな。フィーロ、フィロリアル姿に変身して足場になれ」

フィーロ 「はい」

フィーロがフィロリアルに変身する。

尚文がフィーロを足場にして天井を調べる。

尚文 「よし、ここだな」

尚文が天井の板を外して手を伸ばす。

尚文 「お？ 簡単に外れたぞ。何があるかな？」

尚文天井裏をがさがさとあさる。

尚文 「あ！ 何か木箱があるぞ」

尚文、フィーロから飛び降りる。

尚文 「さあて、中身は何だろうな」

SE…箱を開ける音。

尚文 「なんかのカギと……(若干トーンダウンする)また地図か」

ラフタリア 「嚴重に隠したって事でしょうか？」

尚文 「こりゃあ、ゲームのお約束、お使いクエストをやらされかねないな」

ラフタリア 「なんですかそれ？」

尚文 「俺の世界にあるゲームの伝統なんだ。各地を巡って、順番に行動を起こさないと目当ての宝が手に入らないって奴だ」

ラフタリア 「た、大変そうですね」

尚文 「面倒だな。誰かに任せるか」

ラフタリア 「そんな投げやりな……」

尚文 「冒険心が疼きはするんだが、付き合っていたら日が暮れそうだ。城の連中にある程度任せよう」

フィーロ 「もう終わりなの？ つまんないー」

ラフタリア 「当初の目的が暇つぶしなんですからもう少しやりましようよ」

尚文 「……はあ。そう言えばそうだったな。しょうがない。探索再開だ」

尚文 N 『そして宝探しを続行すると出てくる出てくる。地図が何枚も…

…しかも製作者が異なる地図が……余りに多いので城の連中にも協力を仰いだのだが……』